

今週の為替相場見通し(2024年4月30日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		154.50 ~ 158.44	158.33	154.00 ~ 160.00
ユーロ	(ドル)		1.0624 ~ 1.0753	1.0693	1.0600 ~ 1.0780
(1ユーロ=)	(円)		164.41 ~ 169.29	169.20	165.00 ~ 170.50
英ポンド	(ドル)		1.2299 ~ 1.2541	1.2494	1.2300 ~ 1.2600
(1英ポンド=)	(円)	*	190.02 ~ 197.93	197.80	190.00 ~ 200.00
豪ドル	(ドル)		0.6408 ~ 0.6554	0.6533	0.6500 ~ 0.6650
(1豪ドル=)	(円)	*	99.13 ~ 103.48	103.45	100.50 ~ 104.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 部坂 洋太郎

(1)今週の予想レンジ: 154.00 ~ 160.00 円

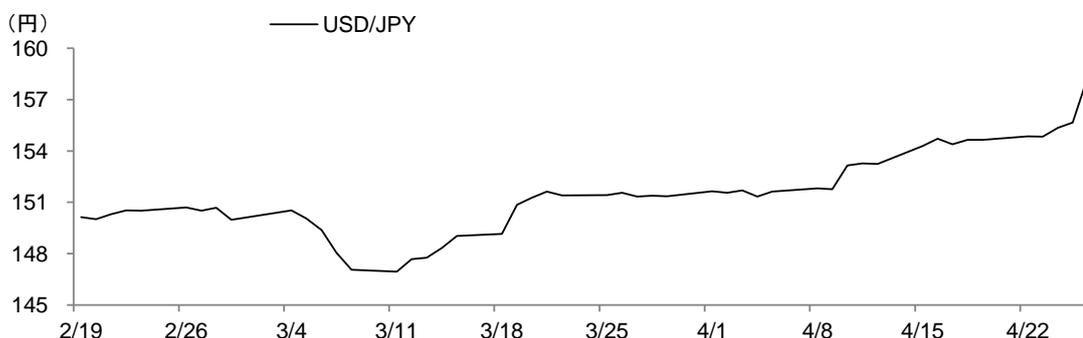
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は、節目の155円を突破。その後、日銀政策決定会合の結果を受けて26日には一時158.44円まで上昇となり、34年振り高値圏を更新して引けとなった。週初22日、154.65円でオープンしたドル/円は、中東情勢を巡る地政学リスクが緩和したことから円売り地合いとなり、154.85円まで上昇し高値圏でクローズ。23日、ドル/円は米金利上昇を背景に154.80円台まで上昇。NY時間に「日銀が週末の政策決定会合で円安の影響を議論する」とのヘッドラインを受けて一時154.56円まで下げるもすぐさま買い戻されて154.84円でクローズ。24日、米金利上昇を背景としたドル買いから155円を抜けると米3月耐久財受注の良好な結果もサポートとなり155.34円で引け。25日、アジア時間から高値を試す展開となり155.75円まで上昇。その後、米国時間に発表された米1~3月期GDPの予想対比上振れした結果を受けて上昇するも、「日銀が国債購入の規模縮小を検討」とのヘッドラインから下落し、155.65円で引け。週末26日は、日銀金融政策決定会合にて政策変更がなかったことを受けて発表直後に156円台を上抜け。さらに、植田日銀総裁の会見にて金融緩和を継続する発言を受けて更に上抜けとなり、NY時間も高値を更新する流れを引き継ぎ、最終的に158.33円で越週した。

今週のドル/円は、引き続き160円を目指す展開を予想。今週は30日(火)~5月1日(水)にかけてFOMCを控えており、足許堅調である物価・雇用関連指標が相次いでいることを受けて前回会合から声明文に関してもタカ派寄りの内容になることが予想される。引き続き、日米の金融政策に起因するドル買い・円売りの流れは変わらないだろう。今週は、1日(水)に米4月ISM製造業景況指数、3日(金)には米4月雇用統計、米4月ISM非製造業景況指数の発表が予定されている。特に3日(金)においては日本が祝日であることから流動性が薄くなるなかで相場が上下に動きやすい相場環境となる。大幅な為替相場の変動は為替介入に対する警戒感を高めるため、神経質な展開が続くであろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/22~4/26)の値動き: 安値 154.50 円 高値 158.44 円 終値 158.33 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第一チーム 南野 光喜

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0780 165.00 ~ 170.50 円

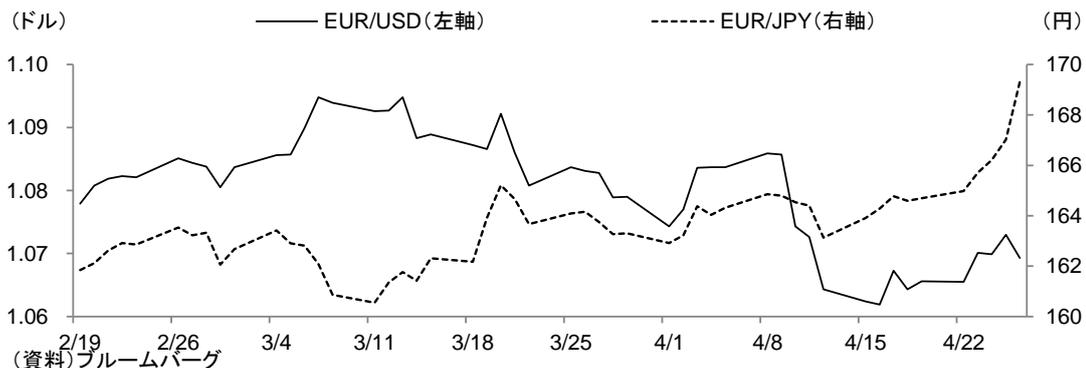
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは米独金利差の縮小を受け、堅調に推移した。週初22日は1.0658でオープンしたユーロ/ドルは複数のECB高官のハト派発言や独金利低下を受け週安値の1.0624まで下落も、その後は米金利低下が下支えとなり、1.06台半ばに値を戻した。23日は独4月総合PMIが予想外に50を上回ったことや、弱い米4月PMIの結果を受けて1.07台まで上値を伸ばした。24日には、特段材料がない中で1.07ちょうどを中心にレンジ推移。25日はじりじりと上昇する推移が続いたが、米1~3月期GDP(改定値)が予想を下回るも、国内最終需要の部分では依然堅調な結果を記録した他、良好な経済指標の結果を受けて、一時1.06台後半まで押し戻された。その後は米金利が上昇幅を縮小する動きを横目に、再び1.07台に乗せた。26日は欧州時間にこの日の高値1.0753を付けた後は軟調に推移し、米国時間には注目の米3月コアPCE価格指数が堅調な伸びを記録した事や、ミシガン大学1年先の期待インフレ率が上方修正された結果を受け、ドル買いが優勢となり一時1.0674まで値を下げる。引けにかけては下落幅をやや縮小させて結局1.0693で越週した。

今週のユーロ/ドルは、FOMCやユーロ圏での重要指標の発表を控えてボラタイルな相場になることが予想されるが、ユーロ/ドルは下落すると予想。今週30日(火)~5月1日(水)に開かれるFOMCでは金利据え置きがコンセンサス。パウエルFRB議長は16日、利下げまでの期間に関し「以前の想定より長くなる」という認識を示しており、今回のFOMCはタカ派色が強い内容となる可能性が高そうだ。ドットチャートは今回公表されないが、FOMC声明やパウエル議長の記者会見で利下げ時期後退が再び示唆されれば、ドル買い圧力が強まりユーロは水準を切り下げる展開となるだろう。一方でECBは、依然として6月利下げの可能性が高いと思われる。23日に公開されたインタビューでデギンドスECB副総裁は6月利下げについて「現在から6月までの間にサプライズがなければ既成事実」と発言。今週発表されるユーロ圏4月CPIや各国の4月CPIの結果次第では、6月以降の連続的な利下げ実施も市場では意識され始めるだろう。そうした状況において、ユーロ/ドルは軟調な推移となる可能性が高そうだ。今週の主な経済指標としては、30日(火)ユーロ圏4月CPI(速報)、ユーロ圏1~3月期GDP、3日(金)ユーロ圏3月失業率などの公表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/22~4/26)の値動き: (対ドル) 安値 1.0624 高値 1.0753 終値 1.0693
(対円) 安値 164.41 高値 169.29 終値 169.20



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2300 ~ 1.2600 190.00 ~ 200.00 円

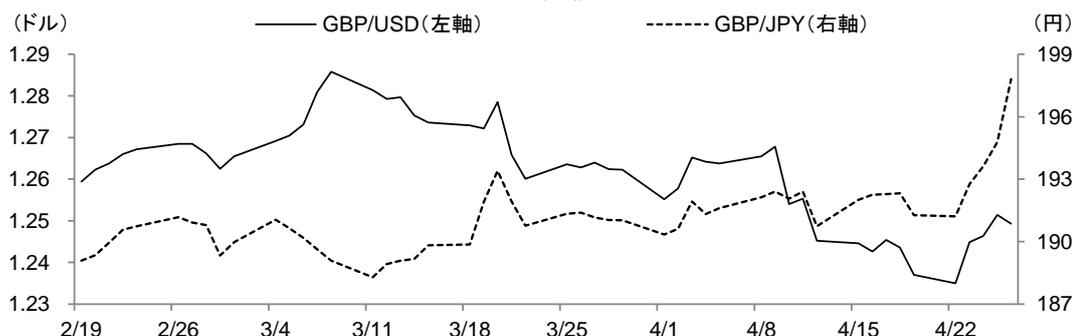
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで反発。イングランド銀行(BOE)が米国連邦準備制度(Fed)よりも早期に利下げを行うという見方が強まりつつあることが今年3月以降のポンド相場の上値を抑えているが、先週はBOEの高官発言がタカ派的だったこともありポンドはやや持ち直した。BOEは5月9日に金融政策決定会合を控える。市場ではBOEの利下げ開始は6月か8月との見方が多いが、エネルギー料金の低下を受けて5月22日に発表される4月分CPIは大幅に低下する公算が大きいこともあり、BOEの委員の間で利下げへの支持が広がるのではないかとの見方は根強い。特に4月17日にベイリー総裁がこうした市場の見方を裏付けるように、4月のCPIはかなりの落ち込みを見せると予想していると発言したこと、4月19日にラムズデン副総裁が、インフレを取り巻くバランスは2024年2月のMPCの予想に比べて下振れ傾向にあると述べたことは、BOEの利下げ開始が近づきつつあるとの見方を裏付けるものとなった。一方、過去1週間のBOE高官発言はややタカ派的であった。4月23日にBOEのピル・チーフエコノミストは、利下げ時期の判断にあたっては慎重に慎重を重ねると述べ、インフレが持続するリスクへの警戒を怠らないことが当局者は必要だと主張した。また、同じく4月23日にはハスケル委員は求人と失業率を注視するとしほか、インフレ期待は驚くほど安定していると発言している。ポンドは対円では大幅に上昇。4月26日の日銀会合を経て円が急落した。

今週1週間は米国でFOMCや雇用統計と重要イベントを控える一方、英国では目立った経済指標・イベントは無く、ポンド相場も米国主導の相場展開となりそう。上述の通りBOEはベイリー総裁やラムズデン副総裁らが利下げに前向きともとれる発言を行っている一方で、ピル・チーフエコノミストやハスケル委員はまだインフレリスクに対して慎重な見方を崩していない。この点、6月での利下げを支持する姿勢が各国中央銀行総裁らから示されている欧州中央銀行(ECB)に対してはBOEの利下げは遅くなる(つまり8月会合以降となる)可能性が高いように思われる。一方、米国ではFedの次なる一手は利下げではなく利上げという見方が台頭している。当面は、こうした金融政策観が為替市場を支配する要因となる公算が大きい。ポンド/円は2008年のリーマンショック時以来となる200円が視野に入っているが、先週の円急落を受けて政府・日銀がどう対応するか注目が集まろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/22~4/26)の値動き: (対ドル) 安値 1.2299 高値 1.2541 終値 1.2494
(対円) 安値 190.02 高値 197.93 終値 197.80



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 岩下 義明

(1) 今週の予想レンジ: 0.6500 ~ 0.6650 100.50 ~ 104.00 円

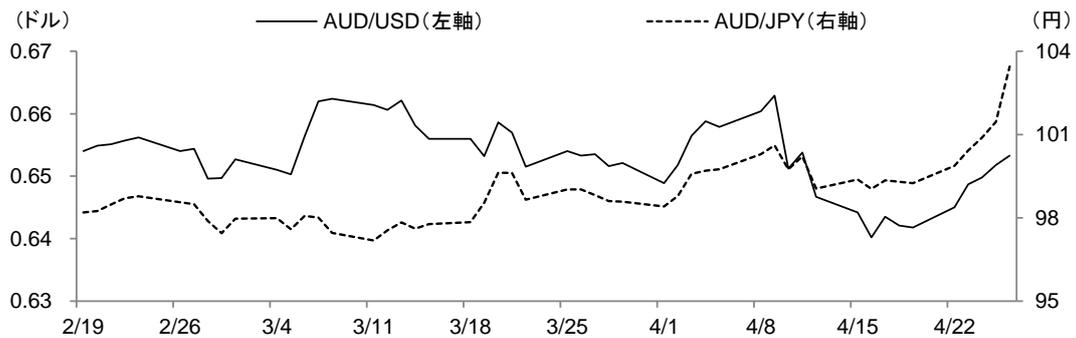
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

週初22日、0.6426でスタートした豪ドルはショートカバーで0.6455まで上昇。その後は下げるものの、NY時間には米株の見通し改善が豪ドルを支えて0.6450でクローズ。23日、日中は豪4月PMIが前回対比上昇していたことが豪ドルのサポート材料に。NY時間は予想対比弱い米4月PMIを受けて米金利が低下してドル売りとなる中、豪ドルは0.6490まで伸ばす。24日、豪1月～3月期CPIが総合的に強かったことから年内の利下げ織込みが約1回から約0.2回まで剥落するとともに豪ドル買いとなり0.6530を付ける。その後はじわじわと戻され0.6498でクローズ。25日、豪州祝日で薄商いの中、NY時間にかけてじわじわとドル売りが進み0.6530近辺まで続伸。しかし強い米1月～3月期PCEコアを受けて米国の根強いインフレが意識されると米金利が上昇、ドル買いとなり豪ドルは一時0.6486まで下落。26日は0.6520近辺で取引開始後小幅上昇するも、米3月コアPCE価格指数が堅調な伸びを示したことでドルが買い進まれて結局0.6533で越週。

今週の豪ドルは底堅い展開を予想。今週は30日(火)に豪3月小売売上高、5月2日未明にFOMC、豪3月貿易収支及び豪3月住宅建設許可数の公表が控えている。先週の強い豪CPIを受けて市場は年内利下げ織込みの消滅どころか年内0.4回の利上げを織り込んでおり、インフレが抑えきれないリスクをマーケットは意識している。インフレが根強いという懸念は米国も同様であり、FOMCで年内利下げ期待が後退するようなタカ派スタンスが示されれば、来週に会合を控えているRBAにおいても利上げを含む一層のタカ派スタンスをマーケットが期待しやすく、短期金利上昇とともに豪ドルが強含む展開になりやすいと思われる。一方、26日に発表されたリパブリック・ファースト銀行の破綻に関しては、2023年のSVBショック程影響は広がらないであろうものの、ドル下押し圧力の要因となりえるので豪ドルへの影響の波及度合いを注視していきたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/22～4/26)の値動き: (対ドル) 安値 0.6408 高値 0.6554 終値 0.6533
(対円) 安値 99.13 高値 103.48 終値 103.45



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。